

●日露戦争と太平洋戦争では、何が違っていたのか

▽リーダーの現実認識

元老・政府首脳はもとより 陸海軍首脳部も
世界の中の 日本の弱い立場 国力を知っていた
情報を大切にし 適所に適材を充てた

▽完璧な勝利は 日本海海戦くらい

旅順 奉天の戦いにしても 際どい勝利の連続
中でも際どかったのが ポーツマス講和会議

●1年半の日露戦争に決着をつける講和会議は、明治
38年8月10日から始まった

▽舞台は アメリカ東海岸

ニューハンプシャー州の港町 ポーツマス

▽主役は 外相小村寿太郎と元蔵相ウイッテ

二人には 大変 重い足枷のついた交渉だった

▽小村は 講和の結果が 日本の判定勝になるよう

土地なり 賠償金なりが 少しでも欲しい

▽ウイッテには「土地も金も一切ダメ」の皇帝命令

▽20日間の交渉は 何度か行き詰まり 決裂寸前に
どうにか纏ったのは

ルーズベルト大統領の 粘り強い調停

▽36年後の 日米開戦につながる

対立の火種も この時から くすぶり出していた

— ルーズベルトの日本最良には… —

新渡部稲造が明治32年、フィラデルフィアで
英文で出版した「武士道」が大きかった。「日本の
魂」と副題のついた本は、武士道の根本は恥
を知る、名誉を守る点にあると説いており、ル
ーズベルトは60冊も買い入れて陸軍士官学校
に寄贈、日本理解の教科書として使わせた。

●新渡部の口癖は「専門センスではいかんよ。カモンセ
ンス、常識的でなくては…」

▽一高校長の時 学生たちに

「ソシアリティ、社交的観念がなくてはダメだ」

どんなに 知識に優れ 徳があっても

実社会で 円満な活動が出来ねば 価値はない

小村 寿太郎 (こむら・じゅうたろう)

安政2(1855)～明治44(1911) 宮崎県飨
肥(おひ)藩出身。明治8年文部省留学生と
してハーバード大卒。13年帰国後、司法
省に入り、17年外務省に転じ、翻訳局長
を経て26年清国代理公使。政務局長、次
官、駐米・駐露公使を歴任し34年桂内閣
外相。日英同盟を締結し、日露講和会議
首席全権。駐英大使を経て41年第2次桂
内閣外相となり、韓国併合を行なう

ウイッテ (Sergei Witte)

1849～1915 明治25年ロシア蔵相。財政
改革に手腕を発揮しシベリア鉄道建設
を推進、極東への経済的進出を図る。日
露戦争に反対し、一時失脚。日露講和会
議全権として返り咲き、帰国後、首相に
就任。立憲政体を推進したが翌年罷免

ルーズベルト (Theodore Roosevelt)

1858～1919 オランダ系名門の出。共和
党選出の副大統領に在任中、明治34年、
マッキンレー大統領の暗殺により第26
代大統領に就任。パナマ運河建設権、日
露戦争の講和を調停するなど積極外交
を展開し、39年ノーベル平和賞受賞

新渡部 稲造 (にとべ・いんぞう)

文久2(1862)～昭和8(1933)盛岡南部藩
出身。内村鑑三と札幌農学校で学び、明
治24年同校教授。京大教授を経て、39年
～大正2年、一高校長として学生に深い
人格的影響を与えた。7年東京女子大総
長。9年から15年まで国際連盟事務局次
長として活躍。生涯を国際平和に捧げ、
カナダの国際会議に出張中、病没した。
著に「武士道」「農業本論」

▽小村は 明治の外交史では 群を抜く存在だった
外交の感覚 見通しにも優れ

日本の外交に「主義・原則の外交」を確立した

▽維新の元勳でもなく 一代で 侯爵にまで

武勲を立てた 東郷平八郎 山本権兵衛

児玉源太郎 乃木希典と みんな 伯爵どまり

▽常識・社交的観念では どうだったのか

ウイッテが 明るく 庶民的に振る舞ったのに

小村は 冷徹なほど 外交一筋だった

社交的観念を 無視したようにさえ 見えた

「世論の国」アメリカを考えると 小村のミス

●常識・社交的観念の点でも抜群だった伊藤博文

▽問題が起これば 必ず 動いた人

▽ルーズベルトと知己の金子堅太郎を 米に特派

日露開戦と同時に 戦争終結の布石

娘婿の末松謙澄は イギリスへ

言論戦・広報活動が任務

英米二国ノ国情ヲ查察シ、其ノ人民ノ同情ヲ

喚起シテ以テ戦役ノ後援トスル

▽有色人種の日本にとり 初の 白色人種との戦争

仏教国対キリスト教国 黄禍論の再燃となり

宗教戦争 白人国に敵視される 危険性も

▽二人とも 親日世論の誘導に 努めた

末松は「旭日」「日本の面影」を 英文で出版

金子も エール大教授に委嘱

日本の対露講和条件につき シンポジウム

●リーダー全員が「限定戦争」の認識で一致していた

▽戦闘区域は 北進しても せいぜいハルビンまで

戦争期間は 長くても 1年余り

▽井上馨と松方正義は

戦費調達の外債募集に 高橋是清を欧米へ

▽大山巖は 満州軍総司令官として出征の際

山本海相に 戦争の軍配の揚げ時を 頼んでいる

▽伊藤は「世論の国」アメリカの 特質を見抜く

「アメリカは世論の力が強大だから、ひとたび世

論が動くと、どんなに政府が日本に同情を寄せていても、止むを得ず世論に迎合する政策を」

東郷 平八郎(とうごうへいはちろう)

弘化4(1847)～昭和9(1934) 薩摩藩出身。海軍大将・元帥。明治36年連合艦隊長官となり日本海海戦でバルチック艦隊を破る。「海軍の神様」と仰がれる

山本 権兵衛(やまもとごんべい)

嘉永5(1852)～昭和8(1933) 薩摩藩出身。海軍大将。軍務局長を経て明治31年～39年海相。ロシアとの戦いに備え「六六艦隊」を整備。大正2年、12年首相

児玉 源太郎(こどもげんたろう)

嘉永5(1852)～明治39(1906) 周防徳山藩出身。陸軍大将。明治33年陸相となり36年参謀次長。日露戦争では、満州軍総参謀長として陸軍の作戦を指導した。39年参謀総長に就任、在任中に急死

乃木 希典(のぎ・けいけん)

嘉永2(1849)～大正1(1912) 長府藩出身。陸軍大将。第3軍司令官として旅順攻略戦を指揮。明治40年学習院長。明治天皇大葬の日に静子夫人と殉死

伊藤 博文(いとう・ひろぶみ)

天保12(1841)～明治42(1909) 長州藩出身。明治18年初代首相となり内閣制度、憲法制定など、国家体制を整備。元老として4次の内閣を組織、3度枢密院議長。33年立憲政友会総裁。38年韓国統監。ハルビンで安重根(朝鮮独立運動家)に暗殺される

金子 堅太郎(かねこ・けんたろう)

嘉永6(1853)～昭和17(1942) 福岡藩出身。藩留学生として明治4年渡米しハーバード大で法学を専攻。帰国後、伊藤博文に重用され、帝国憲法起草に参加、農商務・法相を歴任。日露戦争中は米国に特派され講和工作に貢献した

●首席全権は、なぜ伊藤でなく小村だったのか

伊藤の「初物食い」

重要なポストには必ず最初に就任した。内閣総理大臣(18年12月、宮内大臣兼務)、枢密院議長(21年4月)、貴族院議長(23年11月)、政友会総裁(33年9月)、韓国統監(38年12月)。みんな初代がつく。

明治天皇は、何か難しい問題が起こると必ず「伊藤に確かめたか」と尋ねたほど信頼されていた。「乃公出でずんば」の自負心があった。

▽桂太郎首相は 講和会議開催が決まると

元老・閣僚を集め 全権を誰にするか 相談した

▽桂の腹は 首席伊藤 補佐として 外相の小村

全員賛成なのに 伊藤だけが 首を縦に振らない
「播いたものは刈らざるべからずだ。日清戦争の時はわしが首相だったから、わしが収拾した。

今度は首相である桂自身が局に当たるのが順序というものだ」 講和会議首席全権は

日清戦争で 下関講和条約を締結(28年4月)

▽結局 首席小村 補佐として 駐米公使高平小五郎

谷干城も伊藤に忠告の手紙

「このたびは是非とも桂、小村を遣るべし。老台を勞するまでの六ヶ敷きことに非ず。もし、老台がおだてられて行く時は老台が槍玉に上がるべし。今度の戦役は二十七、八年とは正反対にして、平和後の内地は惨憺たる状況は火を見るよりも明らかなり。この度の談判は誰が任じても妙案なし。桂、小村にて沢山なり。徒に馬鹿者の怨をかうは愚の至りなり」

▽伊藤も 先の見える点では 人後に落ちない

継戦能力がなければ 交渉の落とし所も 見当が

●日本の国力は底をついていた

▽参謀総長山県有朋は 桂首相 小村外相に

「政戦両略概論」を提出した(38年3月23日)

▽第一に ロシアは まだ本国に 強大な兵力

日本は あらん限りの力を 使い果している

13師団は 全て 前線に出払っていて

国内には 正規の予備兵力はない

末松 謙澄(すえまつ・けんじょう)

安政2(1855)～大正9(1920) 豊前小倉藩出身。明治4年東京日日新聞記者となり伊藤博文の知遇を得て娘婿。11年渡英、ケンブリッジ大で文学・法学を学び、19年帰国。法制局長官、逓信・法相を歴任。日露戦争中は英国に特派され英世論の日本理解に努める。その間、10数年を費やして「防長回天史」(全12巻)を編纂

井上 馨(いのうえ・かおる)

天保6(1835)～大正4(1915) 長州藩出身。維新後、財政・外交の衝に当たり、大蔵大輔、外務卿を経て明治18年外相。条約改正に失敗し辞職。内相、蔵相を歴任し、元老として財界に指導力を発揮

松方 正義(まつかた・まさよし)

天保6(1835)～大正13(1924) 薩摩藩出身。明治14年から16年間大蔵卿・蔵相を務め、日銀創設、兌換銀行条令制定など財政の基礎を作る。24年、29年首相

高橋 是清(たかはし・これきよ)

安政1(1854)～昭和11(1936) 江戸生まれ。日銀副総裁の日露戦争中、外債募集に成功。日銀総裁、蔵相を歴任し大正11年首相。昭和2年田中内閣蔵相となり金融恐慌を収拾。満州事変後、犬養・斎藤・岡田内閣蔵相。二・二六事件で暗殺さる

大山 巖(おおやま・いわ)

天保13(1842)～大正5(1916) 薩摩藩出身。陸軍大将・元帥。明治10年陸軍卿、18年陸相。日清戦争で第2軍司令官。34年参謀総長に就任し日露戦争では満州軍総司令官。大正3年から内大臣

桂 太郎(かつら・たろう)

弘化4(1847)～大正2(1913) 長州藩出身。陸軍大将。明治31年から伊藤・大隈・

▽出血の多さは 陸軍の予測を はるかに上回った
▽戦時の戦闘要員は 現役(4年) 予備役(4年4ヵ月)
とても足りず 徴兵令を改正(37年9月28日)
後備役(5年)を10年に延長 前線へ投入された
▽「機密日露戦史」には「後備旅団全く用をなさず」

「機密日露戦史」

陸大教官谷寿夫大佐(のち中将、南京虐殺事件の責任を問われ戦後の現職で死刑)が大正14年、学生に講義したガリ版刷りの講義録12冊(昭和41年印刷)。軍事秘密資料を使い、関係者の証言も集めた貴重な戦史。

▽徴兵検査の合格基準も 奉天会戦(38年3月10日)後
下げられた 戦闘要員(5R2以上)は 5尺以上に
兵種によっては 4尺9寸で合格
新聞の見出しには「寸足らずの兵隊さん」

●働き手を戦場に取られ、経済への影響も深刻だった

▽戦地に動員した陸軍兵力は 95万人
兵役年齢400万の 4分の1が戦場へ

瓜生繁子がアメリカの友人に送った手紙

「今日は働き手を戦争に取られた家族を十七軒歩いて訪問してきました。老いも若きも、お金持ちも貧しい人も皆二日間の通告で召集されています。私の兄の会社の三井物産では、五十人もの番頭達が銃を持つために戦争にとられていきました」彼女は下谷区の出征家族を訪問しては相談に乗っていたが「この区だけでも五百六十四人が召集されました。貧しい人達の悲惨な生活を見て帰ってくると、気分がとても落ち込んでしまいます。留守家族は皆働きたがっているのですが、仕事が思うようにならないのです」この手紙はニューヘブンの地元新聞で紹介されて大きな反響を呼び、5ドル、10ドルの義援金や慰問品が送られてきた。

●山県意見書は、第二に将校の不足を訴えている

▽戦地勤務の歩兵将校 1260人の2割
263人が戦死 それも 突撃の先頭に立つ
大尉以下の歩兵将校に 犠牲が集中した

山県内閣陸相を歴任。34年首相に就任、日英同盟を締結、日露戦争を遂行した。41年再び首相、韓国併合。42年内大臣兼侍従長となり、大正1年3度首相に就任。護憲運動が高まり2か月で辞職

高平 小五郎(たかひら・こごろう)

安政1(1854)～大正15(1926) 陸奥一関藩出身。明治32年外務次官。33年駐米公使、日露講和会議全権。41年駐米大使となり、太平洋現状維持・中国機会均等を定めた「高平・ルート(米露協定)締結

谷 干城(たに・たてき)

天保8(1837)～明治44(1911) 土佐藩出身。陸軍中将。西南戦争で熊本鎮台司令長官。明治18年伊藤内閣農商務相。学習院長、貴族院議員を歴任

山県 有朋(やまがた・ありとも)

天保9(1838)～大正11(1922) 長州藩出身。陸軍大将・元帥。明治6年陸軍卿となり軍制・徴兵制を確立。18年伊藤内閣内相。22年首相。日清戦争で第1軍司令官。31年再び首相に就任し軍部大臣現役武官制を実施。日露戦争では参謀総長。長州閥元老として陸軍、政界に君臨した

瓜生 外吉(うりゅう・そきち)

安政4(1857)～昭和12(1937) 石川県大聖寺藩出身。海軍大将。米アナポリス海軍兵学校卒。日露戦争では第2艦隊司令官(中将)。のち佐世保・横須賀鎮守府長官

女子留学生

明治4年北海道開拓使次官黒田清隆(のち首相)の提唱で、5人の女子留学生が岩倉使節団と渡米した。津田梅子(細野大の前身女子英学塾)7歳、山川捨松(大山巖人)11歳、旧幕臣の娘永井繁子は8歳。繁子は一足早く帰国、瓜生外吉と結

慌てて陸士の募集人員を増員

301人に増やしたが、試験成績不良で37年7月採用は250人。ところが、旅順第1回総攻撃で犠牲の大きさに驚いた陸軍省は8月26日、質より量だと一旦は不採用とした者も追加合格とした。さらに9月15日に400人を追加募集したが、5人の大將(山下奉文、阿南惟幾は陸軍中央幼年学校からの進級)を出した陸士18期生。

繰り上げ卒業させても補充が追いつかず、中学以上の学歴があれば予備役少尉とする特例措置で1789人の下級将校を作った。

▽このまま 戦争が続けば

軍隊の組織維持さえ 難しくなっていた

陸軍を苦しめた国民病脚気

日露戦争では、戦闘で6万、病気で2万4千人が死んでいるが病死の半数以上は脚気。毎月1万人が脚気で入院し延べ11万人が戦力にならなかった。陸軍の主食は1日白米6合。軍馬17万頭には1頭1日5升の麦が必要で、麦は補給の生命線である馬に回された。

白米主義で戦った陸軍も奉天の戦いの後、麦飯採用に踏み切る。焼いたお握りを懐で温めながら戦ったが、氷点下20度を超す寒さに凍ってしまい、煮炊きしないと食べられない。戦場でそんな余裕はなくパンを嗜りながら戦う部隊が出たが、脚気が出なくなった。

今でこそ脚気はビタミンB₁の不足による栄養失調だと誰もが知っているが、コッホ(1843~1910)が結核菌、コレラ菌を発見しドイツ医学、細菌学全盛の頃。ドイツに学んだ陸軍の軍医、東京帝大医学部も、細菌による感染だと、空気の流れをよくするため、兵舎の改築を奨励したという。前線からの強い要請で、軍医の反対を押し切って麦飯に切り替えたのは、自身も脚気に苦しむ麦飯を食べていた陸軍大臣寺内正毅の鶴の一声だった。しかし、高木の主張が学問的に証明されるのは、明治43年、鈴木梅太郎がオリザニン抽出した時だった。

婚した。実兄益田孝は三井物産社長。

海軍は麦飯を採用していた

もともと脚気被害は、海軍の方が深刻だった。毎年水兵の4割近くが脚気になり、明治16年には、遠洋航海から帰ってきた軍艦竜驤で患者169人、死者23人。

英国留学帰りの海軍軍医高木兼寛は、食べ物、蛋白質不足に原因があると、パン食切り替えを主張したが、経費が3倍もかかり何よりもご飯に馴染んでいることもあって、猛烈な反対が出た。そこで高木は、軍艦筑波が遠洋航海に出た時、竜驤と同じコースをとらせて人体実験をした。白米をやめ、蛋白質の多い食糧を満載した筑波からは軽症者が10人ほど出ただけ、死者は出なかった。高木は実証医学で海軍に麦飯を採用させた。

日清戦争では、戦闘の死者は千人足らずなのに脚気では4千人も死んでいる。しかし陸軍の軍医は、高木の主張を「根拠のない妄説」と見向きもしなかった。

高木 兼寛(たかぎ かねひろ)

嘉永2(1849)~大正9(1920) 宮崎県生まれ。海軍軍医。明治8年英国留学。13年帰国し、翌年成医会を結成、成医会講習所(現練馬区) 所長。18年海軍軍医総監

寺内 正毅(てらうち まさたけ)

嘉永5(1852)~大正8(1919) 長州藩出身。陸軍大將・元帥。明治35年陸相。43年朝鮮総督。大正5年首相に就任しシベリア出兵を強行、米騒動で総辞職

鈴木 梅太郎(すずき うめたろう)

明治7(1874)~昭和18(1943) 静岡県生まれ。明治40年東大農学部教授。43年米糠からオリザニン(ビタミンB₁)の抽出に成功した。昭和18年文化勲章受賞

●山県意見書は「今後攻勢をとるには、奉天—ハルビン間の鉄道を複線で敷設、兵力増強」を強調していた
▽日本の国力では 出来っこないから

言わんとしていることは

「軍事的勝利は、これ以上望めないから、
日本が有利なうちに講和を急げ」

▽児玉(滿州戰艦長)は 表向きは

戦況報告で 帰京(3月28日)したが

長岡外史参謀次長を 怒鳴りつけた

「何をぼやぼやしている。火を点けたら
消すことが肝心なのを知らんか」

▽児玉は 戦争終結へ向けて

元老・政府首脳のシリを 叩いて回った

▽4月8日の閣議で 今後の作戦・外交方針を決定

作戦面では 現在の地位を守り

外交面は 迅速且つ満足な平和実現に 努力する

●4月21日、初めて具体的な講和条件を閣議決定

講和条件の大綱

[絶対的必要条件]

- ①韓国を日本の自由
処分に委せる
- ②一定期限内の日露
両軍の満州撤兵
- ③遼東半島租借権と
ハルビン—旅順間
東清鉄道の譲渡

「出来るだけ貫徹を
はかる条件」

- ①軍費の賠償
- ②中立港に逃げ込ん
だ露艦艇の引渡し
- ③樺太の譲渡
- ④沿海州沿岸の漁業
権の譲渡

▽ポーツマス講和交渉で 日本側要求の出発点に

▽賠償金と樺太は

簡単には 取れないだろうと

最初から 努力目標に 落としていた

▽「講和を求めるのは負けた方だ」

日本からは言い出せず 頼みはルーズベルト

●ルーズベルトは、金子に「講和仲介の意思」(37年6月6日)を伝えてはいたが…

▽ロシアは 満州を占領し 独占している

「満州開放」を約束して 戦争に入った日本と

アメリカは「門戸開放」で 利害が一致していた

長岡 外史(おがが がいし)

安政5(1858)～昭和8(1933) 長州藩出身。陸軍中將。明治37年参謀次長となり日露戦争を指導。第13師団長(副)の時、オーストリアのレルヒ少佐を招いてスキー技術を学ばせ、民間にも伝えた。航空界発達にも尽力。大正13年衆院議員

「機密日露戦史」

「児玉総参謀長が今や戦局收拾の秋なりと説けるは、公然の秘密にして、亦公然の公然」

明治の軍人の現実認識

彼らは学歴こそないが、幕末から戊辰戦争にかけて自ら白刃の下をくぐり、西南戦争、日清戦争では指導的地位にあって、戦争を肌で知っていた。大局を誤らない戦略眼、指導力を身につけていた。

また、負けた経験を持っていたことが大きかった。明治維新は、薩長という勝者、徳川という敗者を生んだが、薩摩は薩英戦争(文3年7月)で東洋艦隊砲撃により鹿児島が火の海になり、長州も下関戦争(文14年8月)で四国連合艦隊の砲撃に敗れている。

彼らは、精神力だけでは勝てないことを肌身で知っていた。

<各戦争時の年齢>

	山県	児玉	大山	山本
日露戦争(1904)	65	52	61	51
薩英戦争(1863)			20	10
下関戦争(1864)	25	12		
戊辰戦争(1868)	29	16	25	15
西南戦争(1877)	38	25	34	24
日清戦争(1894)	55	42	51	41

「門戸開放」の提唱

海外市場獲得に、遅れて登場したアメリカにとって、潜在市場としての

▽ルーズベルトの本音は

日本には 勝ってほしいが
勝ち過ぎて 強くなり過ぎるのも困る
ロシアが 負け過ぎないところで
戦争を 終わらせたい

▽そこに 満州の「門戸開放」の条件があり
講和を調停することは 条件を作り出すこと

●ルーズベルトは38年2月8日、講和斡旋に動いた

▽まず 仏大統領を通じて ロシア皇帝に
講和を打診したが 回答は「ノー」
「満州の決戦はこれからだし、バルチック艦隊が
極東へ向かっている。陸と海で勝敗を決する」

▽奉天会戦が 日本勝利に終わると
3月16日 高平公使を招いて 提案した
「ロシアは、自分の方から講和を求めると、日本
に屈辱的な条件を出されるのではと心配して
いる。日本としては、一本の逃げ道を作ってや
る方が得策と思う。この際日本は、講和の意思
があることを列国を通じて伝えてはどうか」

▽ヨーロッパの金融資本に
ロシアに革命が起これば「貸し倒れ」の心配
米駐在の仏・独大使が ルーズベルトに
「日本からの講和申し出」を 希望していた

●小村の方針は一貫していた

▽日本から言い出せば 弱みを見せたことになる
かえって ロシアのタカ派を刺激し
和平の芽を 摘んでしまう

▽小村は ルーズベルトが
どんな条件で 動いてくれるのか
真意を探るため 高平公使を通じ 電信交渉
▽ルーズベルトは 重大な意思表示を していた
「戦争が終わったら、満州は支那に返せ」

●日本海海戦の大勝利こそ、待ちに待ったタイミング

▽小村は 5月30日 高平公使に訓令した
「日露両国を協議の場につかせるには、第三者の
斡旋が必要と考える。日本政府は、その任に大
統領が当たられることを望んでいる」

中国が列強の縄張り化していくことは、好ましくない事態だった。明治32年9月、国務長官ジョン・ヘイは、門戸開放の原則を守るよう回状の形で日本をはじめ英、露、独、仏、伊に呼びかけた。中国における各国の勢力範囲の存在を認め、その中の通商の「機会均等」を求めたもので、アメリカ外交の「錦のみ旗」となった。

ルーズベルトの手紙

ロッジ上院外交委員長に宛てて「思うに、ロシアの勝利は文明に対する一大打撃であると同時に、東亜の一国としてのロシアの破滅も、予の所見にては均しく不幸であろう。日露相對峙し、互いに牽制して、その行動の緩和を計るといのが最善である」 (38年6月16日)

小村とル大統領の電信交渉

村「日本政府は全ての条件について他国の干渉を受けず、宜しく日露両国政府の直接談判にて決定すべきものと認む。貴意如何」

ル「講和条件は、日露両国間において直接協定せらるべきは勿論なり。ただし支那分割の患いを除くため、日本は満州において門戸開放主義を維持し、かつこれを支那に返還することと了解す」

村「満州において門戸開放主義を維持し、それを支那に返還すべきは言うまでもなし。願わくは、講和談判開始の方法を示されたし」

ル「ワシントンにおける日露代表者直接談判しては如何」

大阪毎日 講和の動きを特報

6月2日付紙面で、[華盛頓(ワシントン)来電 31日特設通信員発] ルーズベルト大統領は既に調停の準備をなして待ちつつ

▽「直接且全然其一己ノ発意ニ依リ」

あくまで 大統領の

自発的な勧告による 講和斡旋を希望した

▽ルーズベルトは 駐露大使メイヤーに言させた

「皇帝が承諾するなら、そのことは秘密にして、
日本からも承諾を取り付ける」

▽ロシア皇帝も「大統領自身の発意で、

日本の同意を得ること」を条件に 勧告受け入れ

●小村は6月10日、米政府に正式に受諾回答をする
と、直ちに新聞発表した

▽国民には「米大統領の熱心な勧告に従った」

またロシアが 簡単に 態度を変えないよう釘

▽街には 号外の鈴の音「露国乞和」の大見出し

国民は「日本勝った、ロシア負けた」と歓喜した

▽講和会議の 開催地については

日本が 清国のチーフ(芝罘)かワシントン

ロシアは パリかハーグ(ワグ)を 希望したが

「ワシントンでもよい」と 折れてきた

▽結局 酷暑のワシントンを避け

軍港で 警備・機密保持にも適したボーツマスに

▽ロシアが 敵地にも近い 米国開催に

同意したのは 全権ウイッテの

「世論国家アメリカ」を 利用しようとの魂胆

●日本全権団は7月8日、客船ミネソタ号で出航

▽東京市内の家々には 国旗が掲げられ

沿道は 見送りの市民の 万歳で沸いた

▽随員の山座円次郎(外務省参事)は 小村に

「あの万歳が、帰国の時に

馬鹿野郎の罵声くらいですめば結構でしょう」

▽国内には 勝利の分け前を 要求する気分が…

▽東京帝国大学 戸水寛人 小野塚喜平次ら

7博士は「対露講和問題同志会」を結成

「賠償金30億円を取れ。樺太、カムチャッカだ
けでなく、沿海州全部を取れ」と決議(6月11日)

▽政府訓令は 元老を交えた閣議(6月30日)で決定

講和を成立させるには

ロシアが受諾可能な 最低限の条件を

要求する以外にないと 全員が一致した

あるも、この際、日本の同意あるにあらざれば何事もなさざるはずなり。

特約通信員カール・オラフリンは後に
國務次官、ルーズベルトの私設秘書を
務めた大物記者。講和会議の報道では
大阪毎日が断然異彩を放つことに。

官報(6月12日附)

在本邦米国公使は本月九日付をも
つて、帝国外務大臣に対し左の照会
をなせり。

大統領の所感をもってすれば、今や
人類一般の利益のために、目下の惨
憐たるかつ痛嘆すべき戦争を終局せ
しむることあたわざるかを見んがた
め、大統領において努力せざるべか
らざる秋まさに至れり。

合衆国が日露両国と友好親善の関
係を保つや久し。合衆国はこの両国
の繁栄、福祉を祈るとともに、この二
大国民間の戦争により世界の進歩阻
碍せらるるを感ず。故に大統領は日
露両国政府において、両国自己のた
めのみならず文明世界全体の利益の
ため、相互間に直接の講和談判開始
せんことを切望す。

右講和談判は全然両交戦国間にお
いて直接にこれを行うべく、換言す
れば、すなわち日露両国の全権委員
は何ら仲介者を設けずして会見し、
もつてこれら両国の代表者において
講和条件を協定することあたわざる
を見るに至らんこと、これ大統領の
勧告する所なり。大統領は熱心に日
本政府に請うに、同政府がこの際如
上会合に同意せんことをもつてし、
また露国政府にも等しく同意を求め
つつあり。

大統領は、講和談判そのものに関し
てはなんらの仲介者を要するを見ず
といえども、もし両関係国にして会

▽「絶対的必要条件」の 3 項目以外は
小村の裁量に 任せることになった

— 誰もが、小村の使命の多難を知っていた —

小村に対する政府訓令は、「最高機密事項」として満州軍首脳にも伝えられたが、児玉は「事情の許す限り貫徹に努める」とした条項に「軍費の賠償は最高額を15億円とし談判の様子でそれ以内に纏める」とあるのを見て、「桂の馬鹿が、賠償金を取る気になっている」

井上馨が小村に「君は実に気の毒なことになった。今までの名声も、今度で台無しになるかも知れない」と涙を浮かべれば、伊藤博文も小村の手を握り締めたまま、「君が帰ってくる時には、他人はどうであろうとも、我輩だけは必ず出迎えに行く」。明治天皇は参内した小村にしみじみとした口調で「誠にご苦勞である」と言われ、「私はいつも小村の傍にいる」と、門出の餞別として愛用の煙草入れを渡された。

●小柄な小村には、いつも「昂然とした感じ」があった
▽身長1 尺 4 3 拵 体重4 0 拵 足らず

— 「機密日露戦史」は… —

議会で日露開戦を報告する小村を「四肢五体ほとんど肉なく、全身ただ骨と皮であったが、その厳正な態度、その心魂から発する語気、肺腑よりほとばしる熱誠が満場の同情を一身に集めた」と書いている。

▽ウイッテは1 尺 8 0 拵の 大男だったが
小村は 少しも 小さく感じさせなかった

▽駐米公使になった時(贈31年)

海軍大尉秋山真之が 留学していた

— 秋山に「人生三つの楽しみ」を語っている —

「人生には三つの楽しみがあるのをご存じですか。貧しく生まれたというのがその一つ、日本を愛するというのがその二つ、日本のために尽くすというのが、その三つです。どうですか、この意見は…」

合の日時及び場所に関して予議を整えるにつき、大統領の力を仮るを利ありとするにおいては、大統領は正当になし得る限り何事にも欣然その任に当たらんとす。

山座 円次郎(やまざ・えんじろう)

慶応2(1866)～大正3(1914)福岡市生まれ。明治34年政務局長となり、日英同盟・日露外交に参画。駐英公使館参事官を経て大正2年中国公使。北京で死亡した

戸水 寛人(とみず・ひろんど)

文久1(1861)～昭和10(1935)金沢市生まれ。明治27年東大教授。ローマ法の権威として知られた。対露強硬論者で「バイカル以東を割譲させよ」と唱え「バイカル博士」の異名をとる。日露講和会議反対の論文で休職処分(のち復職)。退官後、衆院議員(当選5回)

小野塚 喜平次(おのづか・きへいじ)

明治3(1870)～昭和19(1944)新潟県生まれ。明治34年東大教授。以後25年間にわたり政治学講座を担当。昭和3年から9年まで東大総長を務め、軍国主義化の中で大学の自治を守る努力をした

…… 李鴻章の顔色を変えさせた ……

清国の代理公使時代、せっせと各国公使館を回って情報集めをする小村に、「ラット・ミニスター」(鼠公使)のあだ名がついた。宴会の席で、宰相李鴻章が「見渡すところ、貴方のような小さな人はいない。日本人は皆そうですか」と見下したように言うと、小村はすかさず「貴方のような大男もいるが、だが多くは愚鈍で、日本では大男総身に知恵が回りかねとかウドの大木とかいって、国家の大事は託しません」と、大笑いしたという。

▽小村の人生は 日本を愛し 日本に尽くす
その背景には 貧乏生活 淋しい家庭生活
藩閥政治の外にいて 日の当たらぬ外交官生活

▽飢肥(お)藩の藩校・振徳堂を 首席で卒業
藩の学費援助で 開成学校(歟)に学び
文部省の第1回留学生(明治8年)として
ハーバード大で 5年間 法律を勉強

ハーバードの小村

「図書室の一隅には端座して黙読する黒髪青顔の一少年あり。鷹揚閑雅、高士の風を帯ぶ」
(米野弥太郎・ハワエル「ハーバード大生観」)
飢肥の「小村寿太郎記念館」には、若い頃の小村の写真が飾ってあるが、鼻筋も通り、目の澄んだ、大変端麗な顔つきの貴公子。

●小村のことを「度胸の魂がのし歩いている」

貧乏物語には、伝説のような話が無数

家財は税金滞納で差し押えられ、居間には動かなくなった柱時計と長火鉢、座布団が2枚だけ。役所へは、夏も冬も色あせた一張羅のフロックコート。雨の日も、傘がないので山高帽の端から雫を垂らしながら、平然と歩いて行く。裏門が近道なのに、わざわざ表玄関へ回り、胸を張って登庁する。昼食の弁当も付けが溜り、仕出し屋が持って来ない。食堂で土瓶を抱え、すきっ腹をお茶でごまかした。

宴会の会費を払わないので、小村には知らせないことにしていたのに定刻には必ず現われて、それも上座に座っている。普段は極端に無口なのに、飲むほどに気炎をあげる。筆無精で手紙は余り残っていないのに、「沢山持っている」という人がいる。全部借金の申し訳の手紙だったとか、600円も溜まった付けの通帳を家宝にしている仕出し屋がいるとか。

▽父親の負債は 2千円ほどだったというが
元利に 小村の遊興が重なり 1万5千円に
(牛飯1杯1銭 東海道の一流旅館1泊2.5銭)
▽青木周蔵(歟)の援助申し出を 小村は断った

李鴻章(りこうしょう)

1823～1901 清末の政治家。太平天国の乱を平定、直隸総督兼北洋大臣となり、以後日清戦争に至る25年間の外交の実権を握る。下関講和条約を締結、軍隊の近代化、近代工業の育成に努めた

秋山 真之(あきやま・まゆき)

慶応4(1868)～大正7(1918)伊予松山藩出身。海軍中将。好古陸軍大将の弟。明治30年6月米国に留学。36年連合艦隊作戦参謀となり日本海海戦でバルチック艦隊を破る。大正3年軍務局長

妻がいて妻のいない家庭生活 ………

帰国した小村は司法省に入り、27歳で17歳の町子と結婚。美人だったが、幼女がそのまま大人になったような女性。芝居見物が大好きで、料理、裁縫は一切ダメ、家事は女中任せだった。

小村は明治17年外務省に移ったが、父親が山林製材事業に失敗し負債が小村の肩にかかってきた。毎晩、借金取りが押し掛け、小村は家に帰らず、酒と女に溺れる。夫婦仲は冷え別居同然。小村が駐米公使になってから死ぬまでの14年間、家事、家計の一切の面倒を見たのは宇野弥太郎。公使館のコックの時、質素で清廉潔白、無欲な人柄に惹かれ、荒涼とした家庭生活に同情したと言っている。公使の小村の持ち物は、フロックコート、和服1着ずつに角帯1本、歯ブラシと歯磨き1袋、手拭1本だったという。

青木 周蔵(あき・しゅうざう)

弘化1(1844)～大正3(1914) 長州藩出身。慶応4年藩費でドイツ留学。明治6年外務省に入りドイツ公使などを経て明治19年外務次官。松方・山県内閣外相を歴任し、39年アメリカ大使

▽「高利貸の金は営業の金だ。幾ら借りても
恩義に縛られない。しかし普通の人ののは違う。
生涯頭が上がらなくなる」

▽解決したのは 開成学校時代の同級生7人の友情
杉浦重剛らが 連帯保証人になり
5千円ほどの金を作ると
高利貸を一堂に集めて「これでどうか」

新しい債務の返済は

杉浦らが毎月10円ずつ拠出、小村も月給から
生活費50円残して100円を充てた。秋山真之が
「借金の返済方法をご教授願いたい」と聞くと
「だから私は借りることを知るのみで、返すこ
とは知らない」と答えたという。

「聖言躬行は天台なり」

古島一雄は杉浦を評して「天台道士は一生他
人の悪口を言わなかった天下唯一人」

杉浦は、明治36年東亜同文書院院長を病気で
辞職。それから7年は病床生活で、万朝報に「故
杉浦先生」の記事が出たほど。貧乏も底をつき
柱は傾き、屋根も破れ、寝ていても青天井が見
える。職人を呼ぶと、新聞紙を3、4枚貼らせ、そ
の上からコールタールを塗らせた。

見兼ねた人が、「小村さんに助力を求めたら」
と勧めたところ、「小村はいやしくも国家の柱
石をもって自ら任ずる男である。それに対し
て我が一家の私事をもって心配をかけてはな
らぬ。のみならず、かつて小村の貧窮時代、自
分は彼を補助したことがあるから、その小村
に対して無心を言うのは、彼に当時の報奨を
求めるような感がする。断じていかん」

杉浦は第一次大戦の頃、日本中学の校長をし
ていたが、展覧会で生徒が「世界は強者の有なり
」と書いたのを見て、「世界は仁者の有なり」
と書き直させたという。

杉浦 重剛(きゆうら・じゆうどう)

安政2(1855)～大正13(1924) 近江膳所
藩の儒者の家に生まれ、号を天台道士。
明治9年英国留学し化学を専攻。15年東
大予備門長。辞職して読売・朝日の社説
を担当。新聞「日本」の創刊に尽力、欧化
主義に抗して国粹主義を唱える。第1回
総選挙に当選したが、翌年「とてもあんな
者との付き合いは出来ない」と辞職。
東亜同文書院院長、日本中学校長歴任。
大正3年東宮学問所御用掛となり、若き
日の昭和天皇に倫理を進講した

古島 一雄(こじま・かずお)

慶応1(1865)～昭和27(1952) 兵庫県生
まれ。号を古一念。新聞「日本」などの記
者生活を通じて犬養毅を知り懐刀とな
る。明治44年衆院議員、当選6回。大正13
年護憲3派連合を働き掛け、憲政会加藤
高明内閣を成立させる。戦後、自由党総
裁に推されたが、固辞し吉田茂を推薦、
吉田の指南番を務める

鳩山 和夫(とよはま・かずお)

安政3(1856)～明治44(1911) 江戸生ま
れ。戦後首相になった一郎の父。コロン
ビア大・エール大で法律を学び、明治19
年東大教授。25年衆院議員に当選、29年
衆院議長。外務次官、早大総長を務める

…… 日清戦争の時、小村は ……………

清国は明治27年7月31日、小村に「国交
断絶」を通告したが、帰国命令の電報が
届かない。小村は引き揚げを決断、各国
公使が「清国政府に護衛を頼め」と勧め
ても、「かえって中国人に馬鹿にされる
だけ」と、独断で公使館の旗を下ろすと
日章旗を先頭に、館員、在留邦人15人が
一固まりになり北京を脱出した。「死ぬ
ときは日本の公使として正々堂々と死
ぬ積もりだった」

●外務省で、小村の不遇時代は続く

▽翻訳局次長の時(明治19年) 局長は鳩山和夫(開成学校同期)
清国代理公使になったのは 38歳の時

▽外交の表舞台に 出てくるのは

山県有朋 桂太郎の 長州閥の引き立てだった
▽腸チフスにかかって 生きた骸骨のようになり
「容貌と引き替えに出世を掴んだ」
外務次官 駐米・駐露公使を経て
桂内閣外相(贈34年)になるのは 小村46歳

●小村外交の特徴は、細心、用意周到、大胆なこと

▽長岡参謀次長が 樺太占領を主張した時
陸軍首脳が「兵力分散になる」と 反対した中
小村だけが賛成した「樺太を占領しておけば
講和交渉を有利に進められる」
▽樺太作戦裁可の時 講和会議開催が 決まっていた
新たな軍事行動が 会議の障害にならないか
誰もが心配する中 小村は 高平公使に
ルーズベルトの 見解を 打診させた

▽ルーズベルトの返事は

「ロシアの講和会議受諾は、休戦を条件にしたものでない。現在でもロシア軍は増強を続けており、たとえロシアが抗議しても突っばねる」
しかも「樺太占領は、日本の講和条件を有利にするだろう」と 付け加えた

▽日本軍は 7月7日 樺太南部に上陸
月末までに 樺太全島を占領した
結果的には 樺太が ポーツマスでの切札に

●小村に与えられた政府訓令は、「絶対的必要条件さえ通れば、講和を結べ」

▽しかし 小村は 賠償金・樺太を取ることが
「愛する日本に尽くす道だ」と 考えていた
▽ルーズベルトとの連絡役を務める 金子堅太郎に
「あくまで講和を纏めると内命を受けている。だが私は、樺太と償金はどうしても貫く積もりだ」

●ウイッテは海千山千、したたかなベテラン政治家

▽交渉の争点は「金と土地」と 思っていた
しかし 皇帝から「1ルーブルの金も
一握りの土地も渡してはならぬ」と 厳命
▽この点で ロシアは 譲れないのだから
会議で 真っ向からやり合っても 意味はない

大胆だが、訓令を待たない行動は規律違反であり、小村が全権に決まると、山本海相は「訓令以外のことは必ず政府の指示を仰いでほしい」と釘を刺した。

長州閥に認められたのは…

小村は日清戦争で帰国後、占領地(後継)の民政長官になると、民心安定が先決と、村々に「食糧や物資の調達は正当な代価で購入する」と通達した。それには軍隊に規律を守らせる必要があり、各部隊の責任者を集め「諸君は王者の軍隊として内外に恥ずかしくない行動をとれ」と要請した。

「俺たちは命懸けで戦ってきたのに余計なお世話だ」と怒ったのが、佐藤正大佐。部下を引き連れ1升壇を下げて、小村の官舎にねじ込んできた。小村が「酒を飲みに来たのか、喧嘩を売りに来たのか」と聞くと「両方だ」。それなら酒を先にしろとウイスキーを茶碗になみなみ注ぐ。2本目が空いた時には、酔い潰れ寝込んでしまった。

第1軍司令官の山県はこの話を聞いて、佐藤を叱責すると共に、外相に電報を打ち、小村を勅任官、少将待遇にさせた。軍人に有無を言わせない配慮だったが、これが縁で山県、その下で師団長をしていた桂との付き合いが始まり、二人とも小村の識見、人物を高く買うようになった。

ウイッテのマスコミ操縦策

ヨーロッパの有名な記者、カメラマンを、ロシア全権団の船に無料で乗せ、大勢同行することから始まった。

中でも、国際的なジャーナリストとして知られるディロン(野村・テレグラフの特別員)、ワレース(前ロンドン・タイムズ特派員)、マタン(仏人)の3人は、ウイッテが秘かにマスコミ担当にした秘密顧問だった。

突破口をアメリカ市民に見つけた

アメリカが日本に同情するのは、日本が負け犬になるだろう、可哀相だと思ったからだ。それが今や、小さな野良犬が、白い大きな洋犬を噛み殺そうとしている。白色人種なら、誰でも野良犬を憎らしいと思うだろうし、またそう思わせる必要がある。それには、アメリカで大きな影響力を持つ新聞を味方につけること。だから、新聞記者には極力愛想よく応対し、市民にも決して横柄な態度をとらず親しみを持たせる。極東の片隅で行われている戦争は、大國ロシアにとっては痛くも痒くもない。

▽ウイッテの作戦は アメリカ世論を味方につけ
アメリカと国際世論を 動かすこと

●頑なに沈黙を守る小村とは、余りにも対照的だった

▽タイムズの記者が 会見を求めても

声明を 読み上げさせただけ

苦情を言う記者に「我々は、ポーツマスへ

新聞の種を作りに来たのではない。外交交渉

をしに来たのだ」余計 記者を怒らせた

▽アメリカという舞台には 大勢の観客がいる

「観客を動かすのは新聞だ」を見落としていた

●ウイッテの場外作戦が、着々とポイントを稼いだ

▽会議が始まると、

ウイッテは 打って変わって 傲岸尊大だった

▽小村が「貴方はまるで、勝者のような口調で

ものを言う」ウイッテはすかさず

「ここには勝者はいない。だから敗者もない」

▽小村は 会議初日 日本側要求12か条を提示した

▽新聞発表は 両国が相談して 発表文を作成

それ以外は 秘密厳守となっていたが…

▽翌日の 朝刊各紙には

一面トップで 12か条が デカデカと

▽ウイッテが AP通信の記者に 洩らした

「日本の要求を広く世間に訴えれば、

ロシアに対する同情を呼び起こすだろう」

▽日本の抗議にも ウイッテは どこ吹く風

朝日新聞は、そんなこととは知らずに大阪毎日のオラフリンに対抗するためディロンを囑託通信員にした。勢い、報道はロシア側の主張に偏ったものになり、朝日の社論が講和に強硬論を展開する一因ともなる。

愛想を振り撒くウイッテ

ニューヨークの港には、大勢の新聞記者が待ち構えていた。ウイッテが、船から駐米大使ローゼンに電報を打ち、記者を集めるよう手配したのだ。ウイッテは気軽にインタビューに応じ、一人一人と握手して、シャンパンを振る舞った。

ホテルの出入り、汽車や自動車の乗り降りの際にも、必ずボーイ、運転手や車掌にわざわざ近寄り肩を叩いて握手を求めた。アメリカの新聞には、行く先々で市民とにこやかに握手するウイッテの写真が大きく載った。

ローゼン (Roman Rosen)

1847~1922 ロシアの外交官。明治30年から3年間駐日公使を務め、36年に再び公使として来日し公使館員時代を含め通算14年も日本勤務。戦争で帰国後、38年駐米大使となり日露講和会議全権を務める。ロシア革命でアメリカに亡命

会議初日の新聞発表

「一九〇五年八月十日ノ会議デ全権委任状ガ交ワサレタ。次ニ日本全権委員ハ講和条件ヲ書面デロシア国全権委員ニ交付シタ。ロシア国全権委員ハ、タダチニソノ研究ニ取り組ミ、成ルベク早ク回答スルコトニナツタ。会議ハソノ回答書ガ完成スルマデ休会スル」

- ポーツマスには、世界各国から123人の特派員
 - ▽人気があるのは「書いて貰っては困る」と
 - 言いながら 何でも喋ってくれる ロシア全権団
 - ▽大阪朝日など 6人の日本人特派員は
 - ロシア側へ 聞きにも行けず 歯軋りしたという
 - ▽日本全権団の 秘密主義のため
 - 各国記者は ロシア全権団に接近し 取材を競う
 - ▽会議の進捗状況も ほとんどが
 - ロシア側が洩らす情報により 伝えられ
 - それが ロシアに有利な世論を 作り出していく

- 会議の衝突は、樺太問題から始まった
 - ▽小村が「間宮海峡は間宮林蔵が発見し、
 - しかも樺太は現に日本軍が占領している」
 - 割譲を迫れば ウイッテは「領土割譲は
 - 降伏した場合だ。ロシアはまだ降伏していない」
 - ▽会議が始まって1週間
 - 東清鉄道の譲渡区間を ハルビンからでなく
 - 長春(05線)からとしたくらいで
 - 日本側「絶対的条件」3項目は 大体 通った
 - ▽小村の 最低の使命は 果たせたが
 - 日増しに強くなる「領土を取れ、償金を取れ」
 - ▽ウイッテは 事あるごとに
 - 記者団に「譲歩したのはロシアだけだ」

- 世論の風向きは、変わりつつあった
 - ▽ウイッテも「樺太で譲る以外に
 - 妥結の道はない」と 思っていた
 - ▽18日の会議を 全権(林、薛、ウイッテ、ローゼン)に
 - 通訳を交えた6人だけの 秘密会にすると
 - 「あくまで個人の考え」と 断った上で
 - 樺太を南北に分ける 二分案を出してきた
 - ▽小村は「占領している北半分を返すには
 - それ相応の代償が必要だ」12億円を提示
 - ▽ルーズベルトは ロシア皇帝に 電報を打ち
 - 講和を勧めたが 皇帝は「談判打ち切り」を指示
 - ▽ウイッテは「最後の会議」の許可を 得ると
 - 23日の会議で ワナを仕掛けた
 - 「もし、樺太全島を譲った場合
 - 日本は金銭の要求を撤回する意思はないか」

日本全権団は外務省へ打電
 是、露国側ノ者ヨリ漏レタルモノニシテ、其目的ノ何レニ在ルカハ解シ難キモ、世人ハ之ニ依リ、却テ我要求ノ穩和ナルヲ知ルベキガ故ニ、其結果ハ我ニ不利ナラズト認ムル。

間宮海峡

ロシア極東・サハリン(樺)北部とシベリア東岸との間にある海峡。南は日本海に接続し長さ663^{km}、最も狭い部分は幅7.4^{km}で、冬季は凍結する。

間宮 林蔵(まみや・りんぞう)

安永4(1775)~弘化1(1844)常陸国生まれ。名は倫宗(とむね)。数学的才能に優れ江戸に出て、寛政11年幕府に仕える。翌年蝦夷地御用雇となり千島諸島を探険し、伊能忠敬に測量術を学ぶ。幕命で北樺太を探険、文化6年(1809)間宮海峡を発見、樺太が島であることを復命した。文政11年(1828)にシーボルトが帰国の際、荷物の中に国禁の地図が発見され、多くの洋学者が処分されたが、間宮は密告者として人望を失い、以降、普請役の裏の職掌である隠密に専念する

米新聞ザ・ワールドには

こんな漫画が載った。大男のウイッテが、はるかに小さい小村に、自分が身につけているものを次々と手渡ししている。韓国というネクタイ、満州というワイシャツを手にした小村が、今度は「樺太の帽子も寄越せ」ともう一方の手を差し出している。
 漫画は端的で分かりやすいし、訴える効果も大きかった。

▽小村は 即座に 拒否してしまった

「日本では賠償金要求を放棄するのは、
樺太全島を放棄するのと同様に困難なことだ」

▽ウイッテの「領土割譲」という 仮定の質問に
否定的な回答をしたことで

日本を「賠償金のためには、戦争継続も
辞さない」という立場に 追い込んでしまった

▽ウイッテは「これで袂を分かつのは心残り」と
26日の会議を 提案すると

記者団に このやりとりを ばらした
「私にはよく分かった。日本は金ほしさに
戦争を続けようとしているのだ」

▽ウイッテ発言は 新聞に 大きく載った

●実は、ルーズベルトは前日(22日)の夜遅く、金子に「親
展」の手紙を届けていた

▽「多額の償金のために

戦争を継続しないよう」忠告の手紙

▽それまで 償金要求に 理解を示していた

ルーズベルトの 大きな 心変わりだった

▽金子のミスは 深夜だったこともあって

小村に すぐ 知らせなかったこと

▽23日午前 小村が ウイッテとの会談に

出掛けた後に 打電したのだが

小村も 償金要求に ルーズベルトの支持が
なくなったことを 知っていたら

当然 出方も 変わっていたらう

▽26日の会議で 主張は 平行線だったが

「28日再会談」で合意すると 小村は

「会議決裂ノ危機ニ至リタル状況」を打電
政府の 最終決断を仰いだ

●事態は、ここから急転した

▽最終態度を決める閣議は 元老も出席して

28日午前8時から 開かれた

▽桂首相は これに先立ち「慎重審議の

時間がほしい」(ポーツマスとの間14時間の差)と

ポーツマスの会議を 29日にするよう指示

▽紛糾した閣議の方向を 決定づけたのは

山県参謀総長の 満州視察報告だった

— ルーズベルトの金子宛書簡 —

「日本が樺太の北半を還付せば捕虜収
容費以外に相当の金額を受くべき理由
ありと存じ候得共、六億ドル(12億円)とい
うが如き巨額を要求するは不可なり。
また実際にこれを取得するは不能なり
と存じ候。単に多額の償金を得んがた
めに戦争を継続するは、文明及び人道
の許さざる所なりと存じ候」

— ルーズベルトの変心は… —

明治37年の大統領選挙で、再選され
たばかりのルーズベルトとしては、
この講和を纏めることでさらに国民
の支持を固めようとしていた。

ところが「日本は金ほしさに戦争を
続けようとしている」との非難の声
が強くなってくれば、そうした世論
を無視できなくなっていた。

— 小村は「戦争継続」の意見電報 —

「樺太、賠償金の譲歩は、日本がロシ
アに屈伏したことを意味する。この
上は断然戦争継続を決意し、第二の
時期を待つて講和会議を再開するし
か道はない」

…… 山県の満州視察報告 ……

明治天皇は戦争の前途を憂慮され、小
村の訪米直後、山県を満州に派遣し、満
州軍の現況、各軍司令官の意見、将兵の
士気について調査させた。山県は7月25
日に満州軍総司令部に司令官を集めて
意見を聴取し、帰京した。

その報告は、ロシア軍はヨーロッパか
ら精鋭部隊を続々と送り込んでいて、
日本軍の3倍になっていること。このま
ま戦争を継続すれば軍事費は17.8億円
にもなり、調達出来ねば弾薬、食糧は底
をつき、全軍満州の原野に立往生する。

▽閣僚の間からは

「戦闘に勝って、戦争に負けるということか」
悲痛な声も出たが

閣議は 全員一致で 全面譲歩を決めた

▽桂首相は 天皇の裁可を得ると

午後8時37分 小村に 政府訓令を打電させた
「樺太、償金ノ二条件ヲ放棄シ、

コノ際講和成立セシムルコトニ議決セリ」

▽ロシア側の出方を 見るため

「まず償金要求だけを撤回し、

土地割譲の要求は続行することにせよ」と指示

▽その1時間後 石井菊次郎(外務顧問)は

マクドナルド英大使に呼び出され 人力車で

▽40分もしないうちに あたふた 戻ってくると

「樺太の南半分は助かるぞ！」

— マクドナルドは緊急電報を見せた —

ロシア皇帝はメイヤー米大使に「償金の支払い要求は断じて受け入れぬが、樺太はロシアが領有して三十年ほどだ。南半分を日本に譲る気持ちがないでもない」これを聞いた英大使が本国に打電、英外務省がマクドナルドに急報してきたものだった。

▽幣原喜重郎(駐米)は 珍田捨巳次官の了解をとり

独断で電文を作成 ポーツマスへ至急電

「先刻電報済ミノ政府訓令ハ、

暫ラク執行ヲ見合ハセ、後電ヲ待タレタイ」

▽桂首相は 報告を受けて 考えた

ルーズベルトは「樺太南半譲渡」を

メイヤー大使の報告で 知っているはずなのに

なぜ 小村や金子に 伝えないのか

▽談判決裂で 両国全権団が

ニューヨークへ引き揚げてきたら

「樺太二分案」を出し 劇的解決を狙ったのでは

▽桂は ルーズベルトに 確認を求めるのをやめ

最終訓令を出した「日本政府独自の立場で、

償金、樺太北半分放棄を会議に提出せよ」

●最終会談は、29日午前10時から開かれた

▽小村が 修正訓令を受け取ったのは 午前零時過ぎ

石井 菊次郎(いしゐ・きくじろう)

慶応2(1866)～昭和20(1945) 千葉県生まれ。清国公使館一等書記官、外務省通商局長、次官、駐仏大使を歴任、大正4年大隈内閣内閣外相。6年駐米大使、9年から再び駐仏大使。空襲で行方不明に

マクドナルド(Claude M. Macdonald)

1852～1915 イギリス外交官。清国公使として北京に赴任し義和団事件で列国義勇軍総司令官。のち初代駐日大使、日英同盟締結など日英協調に尽力した

— 「樺太・千島交換条約」 —

明治8年5月7日、榎本武揚が特使となり調印したロシアとの国境画定条約。両国人雑居とされていた樺太をロシア領に、千島列島のうち得撫(ウツ)島以北の島々を日本領と規定。

幣原 喜重郎(ひげら・きじゅうろう)

明治5(1872)～昭和26(1951) 大阪生まれ。外務省に入り大正4年外務次官、8年駐米大使となり、ワシントン会議全権。13年以来加藤(朗)・若槻・浜口内閣外相を務め親英米・平和外交を展開、ロンドン軍縮条約(昭和5年)を成立させた。戦後、20年10月首相に就任。24年衆院議長

珍田 捨巳(ちねだ・すけみ)

安政3(1856)～昭和4(1929) 弘前津軽藩出身。米国留学後外務省に入り、明治33年駐露公使。34年から外務総務長官、外務次官を歴任。41年駐独大使、44年駐米大使。東宮大夫を経て昭和2年侍従長

…… ロシア皇帝の心変わりとは……

国内にストが続き、6月28日には「戦艦ポチョムキンの反乱事件」が起きた。オデッサ軍港に停泊中、スーパに蛆虫が入っていたことから水兵が騒ぎだし、

▽ウイッテは「樺太南半分譲渡」の皇帝命令を受けたものの 償金なしでは

妥結の望みは 少ないと思っていた

▽内ポケットに「会議決裂」の至急電

小村が 償金要求にこだわれば 隣室の随員に「ロシア煙草を持ってきてくれ」と 電文を渡す

▽「ロシア煙草」は 打電せよの合図で

満州の 全ロシア軍に対する 進撃命令だった

▽ウイッテは「勅命により最後回答をする」

「樺太北部を金銭上の報奨なくロシア領とすることを条件に、樺太南部の日本譲与に同意する」

▽ウイッテが 固唾を飲む中

小村は 5分ほど熟読した後 回答した

「日本政府は平和の克服を切望し、講和談判を円満に終了する趣旨を以て同意する」

▽半ば 拒否を予想していた ウイッテは

「瞬間思わず呆然とし、やがて頬が紅潮するのを感じた」と 回想している

▽会議室を出ると 別室の随員に叫んだ

「諸君、平和だ！ 日本は全部譲歩した」

▽ルーズベルトも 交渉成立を聞いて

「上出来！これほど嬉しいことは近年にない」

●ウイッテは、各国記者団に「我々は外交的に大勝利を博した」と豪語したが…

▽一度は 樺太放棄まで考えた 日本とすれば

小村の粘り勝ち 伊藤が全権でも 同じ結果に

▽ただ アメリカ世論が 違っていたらう

アメリカ人は 日本の奉天勝利に驚き

日本海海戦に 日本人同様に 歓喜した

日本人と見れば 我がちに 握手を求めた

▽伊藤だったら

ウイッテに 遅れをとることは なかったし

親日感情を 一層 しっかりしたものに

「日本慈善基金」

小村はポーツマスを引き上げる時、感謝の印にニューハンプシャー州に1万ドルを寄付した。3日後に知ったウイッテも、慌てて同額を寄付したが、州は「露日基金」と名付け、日露両国の国債を買って利息を慈善事業に充てた。

艦長がリーダーの水兵を射殺すると、怒った水兵が艦長、士官を殺害、マストに赤旗を立てた。スト中の労働者、一般市民も加わり、市内に放火。騒乱状態となって、ロシア革命のきっかけとなる。

ドイツ皇帝も講和を勧めてくるし、フランスの金融資本は、「戦争継続の公債には応じない」と通告してきた。

ウイッテの提示した回答書

皇帝陛下ハ、極東平和ノ回復ニ資セントノ誠実ナル希望有セラルル一新証トシテ、薩合連島(ザハリン=嶺)北部ヲ何等金銭上ノ報奨ナクシテ露国ノ保有ニ委スルコトヲ条件トシテ、同島南部ヲ日本国ニ譲与スルコトニ同意アラセラル。

東京は騒乱状態になった

講和条約調印の9月5日、日比谷公園で「屈辱講和反対」の国民大会が開かれ、暴徒と化した群衆が内相官邸や国民新聞社を襲い、東京市内の交番の8割に当たる364か所が破壊、焼失した。

「ルーズベルトがこんな講和を押し付けたのだ」群衆の見当違いの恨みがキリスト教会に向けられて13か所が焼き払われ、米国の国民感情を悪くした。

小村の帰国は10月16日

この日、14日に批准された日露講和条約が公布された。横浜港には、約束通り伊藤博文が出迎えた。新橋駅、沿道では万が一に備え銃剣をつけた兵隊が警戒に当たった。小村の両脇には、暴漢が現われたら「その盾になる」と言わんばかりに、桂首相、山本海相がびったり寄り添っていた。

しかしロシアの利息は、ロシア革命で来なくなった。日本も太平洋戦争で一時中断したが、昭和26年、溜まっていた9年分の利息を倍にして再開、名称も「日本慈善基金」と改められた。

▽小村は 2年ほど後 渋沢栄一に 語っている
「これからの外交は、大臣や政府の役人によるだけではなく、事業家や民間人による国民外交が行われるのでなければ、円満な国交は望まれない」民間外交の重要性を 強調した

▽ポーツマスで 世論の変化と
その影響力を 目の当たりに 体験して
「外交交渉には世論の支持、そして世論を正しく育てることが大切だ」 痛切な反省

●「満州開放」を国民外交の土台にしていたら…

▽満州の権益に 目を奪われ
国際道義を忘れたことから、日米対立へ
▽満州駐屯軍は まだ 講和会議が始まる前
7月1日から 占領地に
日本人だけに 居住・営業を許可した

…… 井口省吾少将(滿州駐屯軍)は訓示している ……

「本月一日より満州の占領地域内において帝国臣民の実業に従事せんとする者の居住営業を許せしは、一は戦後満州における収利の基礎を固め、将来におけるわが文明扶植のために地歩を作り…」

▽「満州開放」を約束して
米英の支持を取り付け 戦争に入ったのに
満州は 日本の「独占市場」になっていく

渋沢 栄一(しぶさわ・えいいち)

天保11(1840)～昭和6(1931) 武蔵国の豪農の家に生まれ尊皇攘夷運動に加わる。一橋家に仕え、徳川慶喜が将軍になると幕臣として、慶応3年徳川昭武に随行して渡欧、近代設備、経済制度を見聞し明治1年帰国。第1国立銀行を設立し、王子製紙、大阪紡績、東京瓦斯などを設立。商工会議所、東京手形交換所を組織し、実業界の指導的役割を果たす

井口 省吾(いぐち・しやうご)

安政2(1855)～大正14(1925) 静岡県生まれ。陸軍大将。陸大教官を経て日露開戦時の参謀本部総務部長。明治37年6月満州軍高級参謀。のち軍事参議官